

■ フォト・エッセイ ■

グルの夜明け—ウガンダ北部の街から—

写真・文
桜木奈央子
Naoko Sakuragi



グルの町を元気に走りまわる少年

アフリカの朝は早い。

ウガンダ共和国北部の町、グル。午前五時。眠っていた町に、政府軍兵士のトレーニングの音がこだまする。夜の闇に少しづつ光が取り戻され、兵士の額の汗を光らせる。

ウガンダ北部一帯では、約二〇年ものあいだ現政権に反旗を翻すゲリラ軍「神の抵抗軍」(Lord's Resistance Army: LRA) が活動が続けており、この地域に住むアチヨリという人々を苦しめている。ジョセフ・コニー率いるゲリラ軍は村々を襲撃するだけでなく、さらなるゲリラ活動のために子どもを誘拐し彼らを少年兵として育てあげ、戦いの前線に送っている。

そういったゲリラ軍の誘拐を恐れて、夜のあいだだけ安全な町の中心に避難してくる子どもたちは「ナイト・コミュニティー」とよばれ、彼らは東の空が明るくなるころ村へ戻り、制服に着替えて学校に行く。

サーモンピンクの空は淡いブルーに変わり、太陽が赤い大地を照らす。ラジオからは陽気なメロデーが流れ、町のあちこちで食事を作るための煙がのぼり、高い空へ消えてゆく。

一日が始まる。

町の中心地から一歩外に踏み出すと、草の海が広がる。ブッシュ(草むら)だ。その中にぼつぼつと集落があり、そこには村の生活がある。しかし現在、村は安心して



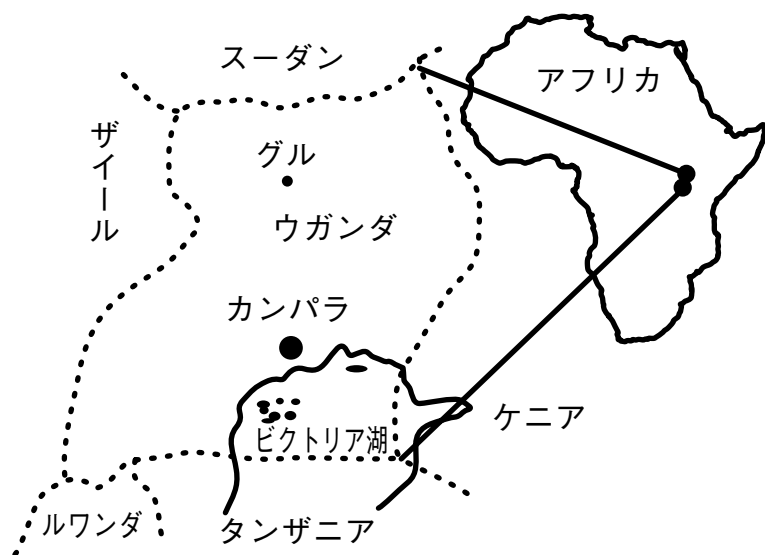
カンパラのバス乗り場。ほとんどが日本からの中古車だ。この中からグル行きの乗り合いタクシーを探すのは大変だ



避難民キャンプ（Awee Camp）にて



ジョセフ



暮らせる場所ではなく、ウガンダ北部地域の約六〇%の住民は、国内避難民（Internal Displaced Persons: IDPs）として避難民キャンプ（IDPs Camp）で生活をしている。キャンプは政府軍によって護衛されているが、キャンプ自体がゲリラ軍の標的になることもしばしばだ。

三年前、キャンプで出会ったジョセフは現在一歳。首に大きな腫瘍があり痛みを伴うが、医者にかかることもできないままだ。ブッシュの一本道で偶然、彼に再会した。三年前に比べ、ジョセフも成長していたが、首の腫瘍も大きくなっていた。「仕方ないさ」とジョセフは横顔を曇らせたが、学校の話をするとき少し表情を明るくしてぼつりと語った。「僕、将来は学校の先生になりたいんだ。」

しかしキャンプ生活では、耕す畑もなく生業が成り立たないため学校に通い続けられる子どもは少ない。また住宅が密集し、下水道もないため衛生状態も悪く、疥癬やさまざまな伝染病が流行している。多くの住民が栄養失調であり、エイズの感染率も高い。

グルの町やキャンプ、村々をつなぐブッシュの一本道も安全ではない。ゲリラ軍はもちろんのこと、長期間続いた戦争によって希望を失った人たちの薬物依存やアルコール中毒が、この地域の未来に暗い影を落としているからだ。また、黒光りする銃をもった若い政府軍兵士が酒に酔い、



市場へ続く道



独立前後の激動のウガンダやアチョリの伝統的な生活について語る長老。平和なころは、集落ごとに毎晩焚き火を囲み長老が民話を語っていたという



マーケットの仕立て屋さん



千鳥足で近づいてくることもある。

灼熱の太陽にじりじりと焼かれながら、町へ続く一本道を歩き、マーケットに寄る。迷路のように入り組んだマーケットの中には、小さな商店が並ぶ。日用雑貨や衣服などが高価なのは、ゲリラ軍の活動がこの地域での日用品の流通を困難にさせているからだ。しかし恵まれた気候のおかげでゴマやサトウキビ、穀物などのバリエーションは豊富で、値段も安い。旬のマングローで作ったジュースが喉の渇きを潤してくれる。

午後四時。小さなグルの町がもともと活気づく時間帯だ。メインストリートには放課後の子どもたちや自転車のタクシーや牛が行き交う。空を見上げると雲の動きが速い。雨雲が遠くに見える。町行く人びとの足取りも、心なしか速くなる。

太陽が沈む前に重いグレーの雲が空を覆い、あつというまに雨と闇がやってくる。雨季には毎日夕方から夜にかけて激しい雨が降り、空を割るように大きな稲妻が走る。闇に追われるように、ナイト・コミュニティたちが町のはずれにある外国のNGOが建てた簡易シェルターを目指して押し寄せてくる。

夜八時、雨は止み、日本のNGOの資金援助によって建てられた「テ・オコノチャイルドユースセンター」では焚き火が始まる。薪は湿っていたが年長の少年が一人人がかりでやっと火をつけた。ちろちろと燃



誘拐された経験をもつ少年



アフリカといえども雨季の朝は寒い



お互いの体温で暖め合うナイト・コミュニティーたち

えるオレンジの火をみんなで囲み、それぞれの村に伝わる民話を語る。

美しいアチヨリ語の発音と、語りに織り交ぜられる古い歌、濡れた草むらから飛んできた蜚と雲の隙間から光る星が、子どもたちの心を癒す。すでに誘拐された経験をもつ子どもも少なくない。また、目のまゝで両親や兄弟を殺された子もいる。学校に通えず毎日食べるのに精いっぱいの子も多い。それぞれに抱えた心の傷が眠っているあいだに疼くのか、夜中に同じ部屋で寝ていると、泣いたりうなされる声があちこちからきこえる。

しかし焚き火を囲んで肩を組んで歌う子どもたちの瞳は、星や蜚よりもきらきらと輝いていた。彼らが平和という状態を知り、別の生き方の可能性を模索できる日はいつ来るのだろうか。ウガンダは二〇〇六年三月に総選挙を控えている。子どもたちが安心して夢を持てるような生活をもたらしてくれるリーダーの出現を、切に願う。

翌朝、子どもたちは眠い目をこすりながら朝焼けの中を歩き出す。昨夜の雨が赤い大地にたくさんの水たまりを作っている。東の空から昇ったばかりの太陽の光が水に反射する。水たまりは希望の光を映し、その上を裸足の子どもたちが飛び越える。

グルに、いつもと同じ朝がやってきた。

(さくらぎ なおこ／フォトグラフィ)